

めぐるりアート 静岡

記憶をめぐる 記憶をつくる

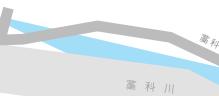
2016/11/1 TUE → 11/20 SUN

*一部会場別会期

中勘助文学記念館・杓子庵

Kansuke Naka
Cottage & Museum

木下琢磨 Takuro Kishita



10/25^金→11/13^日

静岡市美術館

Shizuoka City
Museum of Art

Nerhol

(田中義久・飯田竜太)
新静岡

10/30^水→11/20^日

アート & スポーツ / ヒロバ

Art & Sports / Hiroba

静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural
Museum of Art

岩野勝人 Masahito Iwano

千葉広一 Kouichi Chiba

日詰明男 Akio Hizume

鈴木基真 Motomasa Suzuki

福井利佐 Risa Fukui

Megururi Art Shizuoka

<http://megururi.net>

アート & スポーツ / ヒロバ

JR東静岡駅北口広場
Tel: 054-221-1044 (8:30~17:15／平日のみ)
静岡市観光交流文化局文化振興課

静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市葵区谷田53-2
Tel: 054-263-5755
開館時間: 10:00~17:30 休館日: 月曜日

静岡市美術館

〒420-0852 静岡市葵区絹屋町17-1 萩タワー3F
Tel: 054-273-1515
開館時間: 10:00~19:00 休館日: 月曜日

旧マッケンジー住宅

〒420-8034 静岡市葵区駿河高松2852
Tel: 054-237-0573
開館時間: 9:00~16:30 休館日: 月曜日

中勘助文学記念館

〒421-1201 静岡市葵区新間1089-120
Tel: 054-277-2970
開館時間: 10:00~17:00 休館日: 月曜日

主催: 静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市(公財)静岡市文化振興財団

問い合わせ: 静岡大学教育学部美術教育講座(漆畠雅子)

Tel: 054-237-9540 (月~木 9:00~16:00)

Mail: urushibata.masako@shizuoka.ac.jp



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM OF ART



めぐるりアート 静岡

記憶をめぐる 記憶をつくる

News 1
August 2016



11/1 TUE → 11/20 SUN

JR東静岡駅北口 会場予定地
「アート&スポーツ」/ヒロバ

※一部会場別会期

見慣れた街が違つて見える
アートをめぐる旅。

「めぐるりアート 静岡」は、静岡市内のさまざまな場所を会場に、今を生きるアートを紹介する展覧会です。静岡大学を中心に3年前から始まりました。今年は新たにJR東静岡駅北口の「アート&スポーツ／ヒロバ」、そして旧マッケンジー住宅と中勘助文学記念館が加わります。静岡県立美術館のエントランスホールやローダン館、静岡市美術館のエントランスホールや多目的室なども会場とし、6人と1組の作家の作品を紹介します。

静岡のさまざまな地をめぐりながら、私たちと同じ時代に生きる作家たちの多様な表現に出合うことで、見慣れた街がちょっと違つて見えるかもしれません。それは記憶をめぐる旅でもあります。JR東静岡駅そばの広大な「空き地」は、かつてこの地の物流を支えた貨物駅でした。今回、そこに古い車掌車を利用した「車掌車ギャラリー」が作品として登場します。静岡の茶産業と社会福祉に貢献したマッケンジー夫妻の旧居も会場となります。

特に東静岡ヒロバでは、会期中、現在進行形で、作家とともに未来の「まち」を作るプロジェクト（「黄金比を使った竹の実験都市」）など参加型のイベントも実施されます。最終日にはその「まち」でコンサートやカフェなどフェスティバルも予定しています。詳細は、次号の「めぐるりNews」やHPで順次お知らせしていきますので、是非皆さんのご参加をお待ちしています。

多くの皆さんに、静岡の地とアートを「めぐり／めぐつて」いただいて、新たな記憶がつむがれることを願っています。

竹と隙間で築く 黄金比の実験都市

造形作家 日詰明男



ひづめあきよし 京都工芸繊維大学建築学科卒業。
川根本町在住。25年来、黄金比に基づくフラクタル構造を、造形や音楽で表現する仕事を続けている。
主な作品は、『民主主義的階段』、『黄金比の茶室』。

迷路の都市と幾何学の自然造形

スタートは建築です。僕は、四角い建築がダメなんです。つまらなくて、学生時代に飽きてしまいました。もっと面白い空間がないだろうかと、建築の延長にある集落(都市)をさがしてたらエーゲ海にある迷路状の集落に魅了されました。それからずっと都市を設計したいと考えています。

それともう一つ魅了されたものが、美しくて素晴らしい自然の造形です。自然のカタチをつくるとしても、なかなかできない。なぜかと考えたときに、幾何学というものがそれまでの自分の中に足りなかつたことに気づき、20歳頃から幾何学を独学ではじめました。特にとりつかれたのが、「黄金比」の自己相似性で、自分自身の中に自分自身の縮小形があるという。植物によく見られ、葉っぱなどの相似形がそうです。これを使って何かをつくりたいと思ったのが、今につづいています。

竹の家が建ち並ぶ五角形の迷路
今回の「めぐるアート」の会場となる東静岡では、ヒロバを使って黄金比の都市計画を

実行します。そこは、黄金比である五角形だけの迷路に、竹でできた家(ティピ)が建ち並ぶまちです。五角形のまちは、最短で目的地に行けるし、コミュニケーションがしやすいなどの利点があります。都会などでスラム街ができるのは、まちを四角形のブロック化したために死角があり、孤立化が進むからです。

素材となる竹は、身近だし、安価だし、失敗しても恐くないため、みんなが何かをつくりたくなる素材です。学生に敷地だけ与え、勝手に竹でつくれというと発明をはじめます。放置竹林を邪魔者扱いせず、資源として有効利用した方がいい。多くの人が、竹でさまざまな構造物をつくることで、自分たちの住むまちをどうしたいを考えるきっかけにもなります。

東静岡に隙間都市を創造

インフラをつくるのが僕の使命です。それを活かすのは、参加者でありボランティアのみなさんです。多くの人のアイデアが加わることで、スゴイことになります。大阪成蹊大学でやったときには、自然発生的にマルシェができ、警察や放送局も加えようと学生たちが決めて、最終的にはちゃんとした都市空間が

できました。祭の日にはどんどん屋も繰り出しましたほどです。インフラをどう使い、どんな都市にするかを決めるのは、やはり住民です。東静岡では、大茶会やコンサート、レストランなどのアイデアが出ています。どんな新しい機能が生まれるか、今からとても楽しみです。

幾何学というと窮屈だと、ワクを決められるようなイメージがありますが、全然そんなことはありません。四角形から五角形へ、新しい幾何学の使い方をすればむしろ余白や隙間が増えて人間の自由が拡大されるでしょう。その点で東静岡は隙間だらけ、どんな都市をつくるかは参加するみなさんの自由です。

最終日には消防署にも協力をしてもらい、ひとつ構造物を燃やすことでみんなの想いを昇華させ、ファイナーレにしたいと考えています。

隙間が増えて人間の自由が拡大されるでしょう。その点で東静岡は隙間だらけ、どんな都市をつくるかは参加するみなさんの自由です。

想像しますか？

アニメ「ドラえもん」に登場する広場(空地)を思い浮かべた方もいるのではないかでしょうか。3本の土管が置かれた、あの広場です。ドラマではここが草野球場になつたり、ジャイアンのリサイタル会場になつたり、ある時はび太の隠れ場所になつたりしています。「ドラえもん」の物語のほとんどは、家と学校との広場で展開されます。

広場は、のび太とその友達にとって家でも学校でもないサードプレイス、大切な第3の場所となっています。

東静岡のヒロバも、私たちのサードプレイスとなるようプランニングされています。さまざまな人が集まりライヴな活動が起ころる人が集まるから行きたくなるという循環が生まれるホットな空間です。そして、そこにはアートやアーティストの力が絶対必要です。

このヒロバは、期間限定の試みですが、静岡市が進めるまちづくり「まちは劇場」の超実験的な空間です。私たちの日常ライフを楽しくするヒロバが、街中に増殖していくための試みです。

最後に大切なことをひとつ、このヒロバは、人間が主役。ヒロバをどう楽しく使い倒すか、どんなライフスタイルを描くかがテーマです。皆様のアクティブラーニングの参考になります。

ヒロバと名付けました。 (アート&スポーツ/ヒロバ)

静岡市企画局政策推進統括監 中島一彦



実験都市「ニューヨーク・アーキテクチャ」@大阪成蹊大学(2004)

「アート&スポーツ/ヒロバ」 JR東静岡駅前にある150m×150mの市有地で、旧国鉄貨物駅跡。創造都市を目指す静岡市が、「まちは劇場」プロジェクトの一環として、今年度から5年間、プレイスメイキングの実験的な場として活用を図る。

光と物語と対話

in 口ダン館

彫刻家 鈴木基真



撮影 Yoshiro Masuda

イメージの中で 出会った風景を彫刻に

主に風景を彫刻にしています。モチーフは、子どもの頃から観ていたアメリカ映画の風景や、インターネット上の画像、ビデオゲーム内の風景などです。リアルに体験したものではなく、視覚媒体の中で出会った風景に想像を交えて彫刻にしています。例えば、モニター上で見る映画のワンシーンの光景は、その世界觀の一部しか映っていません。そこを延長して实物としての奥行きをつくり、イメージを補完して、実際の物質性を与えていくところに創造性を感じます。もとのストーリーから派生するサイドストーリーをつくっている感覚とも言えます。

さまざまなモチーフから年代や状況やスケール感もバラバラに制作された木彫作品が集ることによって、新たな視点と関係性を生み、観る人それぞれが各々の物語を想像できるような展示手法を取っています。そのため作品内に人体彫刻は存在しません。視点を一人称にし、観る人自身が主人公になつて欲しいからです。

イメージに近づけるための手法

最近は彫刻だけでなく、粘土で正面性の強い彫刻をつくり、それを写真にするという作品も発表しています。画像上の平面的な風景を立体化する作業をずっとやってきて、ふと立ち止まつたときに、「不必要的部分をつらされていないか」と思いました。完全に立体にするという魅力はありますが、もっと純粹につくりたい部分だけをつくつたらどうなるのだろう、と。

写真は自分の彫刻の、光、大きさ、複製などの問題を自由にしました。自分の彫刻作品は平面的なイメージから始まっています。ですからそこに回帰させたいというのは当然なことだつたと思います。この写真作品を通してモチーフの選択肢が広がり、モニターサイズを超える大型の木彫作品も手がけられるようになりました。

口ダン作品と 自分の作品が対話



すずきもとまさ 浜松市生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。2008年に第11回岡本太郎現代芸術賞入選、2010年群馬青年ビエンナーレ優秀賞受賞。近年は、瀬戸内国際芸術祭2013に参加。



ロダン館内 上から

今回の展示では、是非とも自分の作品を県立美術館のロダン館で展示し、彫刻についての答え合わせ的なことをしたかった。自分がこれまでイメージと物質の関係について彫刻をやってきて、幾つか気づいたことがあります。例えば、彫刻はどちらに光源や視点があるかで見え方が全然違う。必ず作家本人が意図した理想の視点があるはずです。ロダンの作品を見ていても、同じようなことを考え、制作をしていたのではないかと感じる部分があります。その部分をロダンの胸を借り、ロダン作品との対話を通して再確認してみたいと思いました。

その答えをみなさんと共有し、彫刻の魅力を再発見し、これから新たな彫刻の可能性を感じていただけたら幸いです。

本年度は主催者として、これまでの静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館に、静岡市と静岡市文化振興財團が加わりました。ギャラリーや映画館なども会場として参加していただきました。

今年度は、アート&スポーツ「ヒロバ」として整備を計画しているJR東静岡駅北口の市有地や国登録文化財建築の旧マッケンジー住宅、さらに市内羽鳥エリアにひつそりと佇む中勘助文学記念館が会場となります。これまで同様、アートマネジメント人材の育成を担う美術展として準備を進めています。

めぐるりアートとは

「めぐるりアート 静岡」は、2014年から3年間、文化庁の助成により静岡大学

アートマネジメント力育成事業の美術分

野実習として展開されました。それは、

2013年に静岡県立美術館が地域と連携をとり、「アートを媒介に、静岡の過去と現在、場と人を結ぶ術を考える」を掲げて実施した展覧会「むすびじゅつ」を継承しています。講師陣（キュレーター）とともに、受講者である地域の文化施設職員やアートに関心のある市民が参加して展覧会をつくりあげてきました。

洋館と車掌車で出会う 現・想

美術家 千葉広一

瞬間に感じたことをその場で定着

私の作品は、その場からインスピレーションを得て描いた絵、あるいはその時々に持つ想いをカタチにし、その場を背景にして写真に撮り、そこに言葉を添えたものです。一部室内もありますが、自然や街の中に出かけていくことが多いですね。

大学では油画専攻でしたが、社会人になり創作から離れていたこともあり、油絵がその素材の特性ゆえに持つ完成までの時間をどちらかしく感じる様になっていました。その時に感じたことをその場で定着できないかという欲求の答えとして、Instagram(インスタグラム・写真に特化したSNS)、写真とドローイングによる表現に行き着きました。

筆ペン一本、小さめのスケッチブック1冊、そしてiPhoneがあればどこでも作品がつくれる気軽さが自分に合っていました。Instagramで作品を発表すると、国内よりも海外の方からの反響が大きく、カナダの写真サイト500pxに取り上げられ、次いで、シリアル・イタリア、イギリスなどで紹介記事が載るようになりました。

カタチにできない悩みを表現

テーマは決めずに、その時々で感じたこと



夕刻、明かりの灯った車掌車

銀河鉄道のジヨバンニになつた気分で

「めぐるアート」では、旧マッケンジー住宅と東静岡駅北口ヒロバで作品を展示します。旧マッケンジー住宅では、そこで生活を営んでいた人の痕跡をかすかに感じます。時を経てかつてそこにあつた体温が薄れつつあるようにになりました。

東静岡ヒロバは旧国鉄の貨物駅跡地であり、私が生まれた年は東静岡に貨物駅ができる年と同じ。マッケンジー住宅とこの車掌車が現役だった時期もほぼ同じで、何かしらの縁を感じます。マッケンジー氏が自宅で星空を見上げていた頃、東静岡の操車場の少し外れたところにあつたかもしれない車掌車が、過去と今、そして未来をつなぎます。

を表しています。高校の教員をしていますので、十代の多感な季節を生きる生徒たちから伝わる心情を表すこともあります。人間同士の関わりの中、生徒たちはカタチにできない悩みや不安を抱えています。それは大人になつた自分も、かつて通り過ぎ、立ち止まり、いまでも迷い込むことのある思いです。そんな共感共鳴する部分を表現したのが、作品となつたコトバやカタチです。Instagramでは、年齢を問わず共感してくれる人たちがいます。

居場所や温もりを感じてもらいたい。東静岡ヒロバの方には、古い車掌車を設置する予定です。その車掌車は、私がネットオークションで購入し、内装に手を入れつづ入つて、私の作品を見て、なにか特別な時間や空間を感じてもらいたい。宮沢賢治の銀河鉄道に乗り、ジヨバンニになつたような気分で見てもらえるのが理想ですね。マッケンジー氏は天体観測が好きだったとのことです

が、私も多くの作品で星を取り上げ、星を見るのが大好き。安心できる場所であるのと同時に、ここからどこか違う場所に行けるような、遠くとも確かにそこにある星のような存在に思いをはせられる、そんな空間になればと考えています。



しばこういち 東京藝術大学絵画科油画専攻卒業。静岡市在住。2012年以降、言葉と映像を組み合わせた作品をInstagramで展開。デンマークの「MAX A5 2012」に参加し、Canon主催「写真新世紀2013」で佳作受賞。

そのほかの参加アーティスト

岩野勝人

京都市立芸術大学大学院彫刻専攻修了。京都市在住。太い鉄筋を無数に曲げて溶接した、実際に座れる人型の彫刻「メンタル・チェア」など、アートと人の関わりを追求。昨年の「めぐるアート静岡」にも参加。



木下琢朗

東北芸術工科大学美術科彫刻コース卒業。掛川市在住。大学卒業後、富山県で欄間彫刻を修行する。近年では地場産材や暮らしと共鳴する作品を展開。自然の素材を活かしたものを作りを通してその土地の魅力を発信している。



Nerhol (ネルホル)

デザイナーの田中義久と彫刻家の飯田竜太により2007年に結成。代表作に数百枚の肖像写真を重ねて彫った「Misunderstanding Focus」や、街路樹を薄く輪切りにして撮影した写真を重ねて彫った「multiple-roadside tree」など。

福井利佐

静岡市生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。1999年JACA日本ビューワー・アート展特別賞受賞。精緻な描写と大胆な構図による独自の切り絵の世界を展開し、さまざまな分野で幅広く活躍している。



©Nerhol Courtesy of YKG / Yutaka Kikutake Gallery